

(二〇二一年度一般選抜A)

国語問題 (六〇分) (この問題冊子は十一ページである。)

受験についての注意

- 一、 監督の指示があるまで、問題を開いてはならない。
- 二、 携帯電話・スマートフォンの電源は切ること。
- 三、 時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 四、 試験開始前に、監督からが指示があったら、解答用紙の受験番号欄の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。
- 五、 解答用紙は三枚ある。解答は解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、 監督から試験開始の合図があったら、この問題の冊子が、右に記したページ数通りそろっているかどうか確かめること。
- 七、 筆記具は、H、F、HBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆やボールペンなどを使用してはならない。訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消すこと。消しにくずはきれいに取り除くこと。
- 八、 解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、 試験時間中に退場してはならない。
- 十、 問題冊子と解答用紙を持ち帰ってはならない。

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

新型コロナウイルスの感染拡大により、現在の世界は大きな危機と変化にさらされています。この問題が人々に認識される直前までは、グローバリゼーションに伴う人々・物資・情報の国境を越えた移動は当然のこととみなされていました。しかし、この感染拡大により人々の移動に制限がかけられ、私たちの生活は大きく様変わりしました。

このような大規模なウイルスの感染拡大をパンデミックといいますが、過去にも何度もありました。特に深刻なものとしては、十四世紀にヨーロッパで流行し、人口の三分の一から二分の一が失われたとされる（あ）、「黒死病」、十七、十八世紀のアメリカ大陸などにおける「天然痘」、第一次世界大戦頃に流行した「スペイン風邪」などが知られています。また、毎年流行するインフルエンザも感染拡大を伴う病気として警戒されています。こうしたパンデミックがもたらす生命への危機や社会にもたらす影響について様々な研究が行われ、対処がなされてきました。その結果、「天然痘」は一九八〇年に世界保健機関（WHO）により根絶宣言が出され、それ以後は発生していません。こうした過去の経験に基づいて、人類は、グローバリゼーションに伴う感染拡大の危機に備えてきたはずでした。しかし、現実に直面してみると、予想もしなかったほどの深刻な事態に世界が揺れているのが現状です。

ここでは、まず人類が経験してきたパンデミックの例として十四世紀の「黒死病（正式名称はペスト）」をとりあげ、当時何が起きたのかを見ていきます。次に、大規模な感染拡大を引き起こす病気にこれまで人類がどう対処してきたのかをまとめ、最後に、現代の世界が直面している問題を述べます。

さまざまな病気という形での不具合を人々の身体にもたらす細菌やウイルスと人類との関係は紀元前にまでさかのぼります。記録に現れてく

るものだけでも数えきれないほどあり、(一い)「黒死病」「天然痘」「スペイン風邪」などは氷山の一角にすぎません。国勢調査などが行われていない前近代の人口の増減を正確に把握することは極めて難しく、十四世紀の「黒死病」や十七、十八世紀の「天然痘」の死者数は研究者により異なるのが現状です。しかし、大規模な感染拡大により多くの人々が亡くなった当時のことは、さまざまな史資料に残されています。

(一)「黒死病」に関する例を紹介しましょう。ロンドンにある大英図書館には「黒死病年代記」という史料があります。これは十四世紀にロチェスター大聖堂で書かれたもので、人口のおよそ三分の一が失われ、葬儀のために遺体を教会に運ぶ人手さえ欠いたため、人々は自分たちの手で家族の遺体を墓地の墓穴に投げ込まなければならなかったこと、多くの働き手が失われた結果、畑を耕す人が足りなくなり労働者の賃金が大幅に上昇したことなどが書かれています。イングランドのワット・タイラーの乱やフランスのジャックリーの乱などの農民反乱が相次いだ背景にも「黒死病」の影響があります。労働者不足に悩む領主が農民の移動の自由を奪うなどしたことが反乱の原因とされています。

人々を神の教えのもとに導くキリスト教会の聖職者も多くが犠牲となり、人々は動揺します。教会は身寄りのない病者を保護する福祉施設の役割も担っていたため、教会聖職者のなかでも日常的に人々と接する司祭が多く亡くなりました。ある地域に残っている司祭の名簿を見ると名前が短期間に入れ替わっているのです。不足する司祭を補うため、一三四九年には司祭の助手である助祭、副助祭、さらにその下である侍祭までが、まだ資格を満たしていなくても司祭に任命されていきます。キリスト教徒が亡くなる前に司祭は罪の告白をうながし神にゆるしをもとめる「終油の秘跡(現在は病者の回復を祈るため病者の塗油の秘跡と呼ばれる)」という儀式を行います。病者に接触する機会が多い司祭が倒れ、地域にいとなくなると、死に(一)瀕している人々は神のゆるしを得られなくなるのではと不安になります。そこで下級の聖職者を司祭に昇格させたのですがそれでも追いつかず、多くの信徒が「終油の秘跡」を受けられずに亡くなる事態に心を痛めたイングランドのバースとウェルズの大司教ラルフは、心正しいキリスト教の信徒男性も司祭の代わりに罪の告白を聞くことができ、それによって「終油の秘跡」と同じ効果が得られるとした文書を一三四九年に残しています。しかもこれだけではなく、男性がいなければ信徒女性でもよい、とも書いたのです。これはもち

ろん緊急事態ゆえの一次的な（ア）そちですが、どれほど多くの人々が犠牲となり、救いを求めて混乱したかがこの史料からもうかがえます。

「黒死病」の流行というと、「メント・モリ（死を思え）」という警句や「死の舞踏」の図像が有名です。絵画や彫刻などさまざまな美術品には、頭蓋骨のモチーフや、骸骨と（イ）おどる人々の姿などが描かれました。中世のヨーロッパは今よりもずっと死が身近で、英仏百年戦争など、戦争や紛争が絶えず社会は不安定で、飢餓や病気で亡くなる人が多かったのです。同時にイタリアでは一四世紀後半にルネッサンスとよばれる文芸復興運動が始まりました。イタリアは地中海を介しビザンツ帝国やイスラム文化圏とも交易があり、東方から多くの物資が流入して商業都市が栄え、その時代には新たな思想や学問が芽吹きました。この地中海交易ルートを通じて「黒死病」はイタリアに上陸し、（ウ）ヨーロッパ全土に広がっていきました。感染症は、人々が交流する範囲の拡大と移動のスピードにあわせて広がっていったのです。

ヨーロッパでも真っ先に「黒死病」と直面したイタリアのヴェネチアでは、これに対応するため現在の（2）検疫制度にあたるものを作り出しました。港に入る前に海上で三十日間隔離して様子を見るというものでしたが、その後四十日間に延長されました。これが今日まで有効な感染症対策のはじまりです。しかし、（三）当時は何がこうした病気をもたらすのか、よくわかっていませんでした。そのため、教会の鐘の音や香で悪い空気を清めようとしたり、薬草をつめた仮面をつけたりしていました。細菌の存在が発見されたのは十七世紀ですが、そのときはまだこれが感染症の原因であるとは考えられていませんでした。十九世紀になってようやくドイツのロベルト・コッホが特定の細菌により特定の感染症を引き起こされることを証明しました。フランスのルイ・パスツールは（ウ）しゃぶつや焼却などで滅菌することにより感染は防げることを発見し、家畜などの感染症対策がすすむようになりました。病気を引き起こす細菌が次々と発見され、日本の野口英世が有名になったのもこのころです。野口英世はアフリカにわたり「黄熱病」の病原体となる細菌を研究していましたが、これはウイルスであったため発見できず、この病気に倒れました。ウイルスの存在は十九世紀末にロシアやオランダで報告されていますが、細菌よりもはるかに小さく、光学顕微鏡ではとらえられないサイズのウイルスを観察できるようになったのは二十世紀に入り電子顕微鏡が作られてからです。意外なことに「天然痘」のワ

クチンの接種は、ウイルスの存在が発見されるはるか以前の十八世紀末頃にイギリスのエドワード・ジェンナーによって行われていました。ジェンナーは「天然痘」によく似た牛の病気、牛痘にかかった女性の水泡からとった液を少年に接種しました。弱毒化されたウイルスを身体にいれることにより免疫ができると病気にかかりにくくなり、予防することができます。このため、ジェンナーは「免疫学の父」と呼ばれています。ジェンナーの功績を世に認識させたのは、パスツールでした。ワクチンとは、ラテン語の雌牛からパスツールが命名したものです。

十八世紀後半から十九世紀にかけては近代国民国家の成立期にあたります。各国が人口や平均寿命などの値をデータとして集め始めたのもこのころです。イギリスやフランスの最初の国政調査は一八〇一年に行われ、これまで憶測する他になかった人口などが明らかになりました。一八四一年の調査では、イギリス人の平均寿命は四十三歳未満でした（注1）。都市部の貧困層の劣悪な生活環境や長時間労働などが社会の課題として認識され、富国強兵政策もあって国民の健康に国家が留意するようになりました。公衆衛生という概念ができ、手洗いやうがいなどによる感染症の予防、ワクチン接種によるウイルス性の病気の予防が制度として整えられていったのです。その結果、二〇世紀後半には「天然痘」などは根絶することができましたが、まだ今日でもインフルエンザや麻疹などの流行は繰り返して起こっています。しかし、おおむね感染症は予防できることがわかり、また先進国などでは衛生状態がよいこともあり、グローバリゼーションに伴う「パンデミック」の危険性はささやかれながらも、それほど重大な問題とは感じられなくなっていたのです。

現在の新型コロナウイルスによる感染拡大は、（エ） 人類が感染症問題をコントロールできていないことを（エ） ろていさせました。十四世紀のヨーロッパでは、「黒死病」は交易を通して人の移動速度にあわせてひろがりました。今日の世界では、二十四時間あれば人も物も地球の反対側にまで移動することができます。航空機、鉄道、バスなどの大量輸送機関が感染拡大に拍車をかけました。輸送機関だけでなく、学校、ショッピングセンター、レストラン、居酒屋、映画館、ライブハウスなど多くの人が集まるあらゆる場所が感染の危険がある場となりました。当初は「接触感染だから安全」といわれていたのに、くしゃみや咳などの飛沫でも感染することがわかり、マスクをして互いの距離

をとるなど新たな対応が必要になりました。何より、この病気の（3）潜伏期間が長く、無症状でも感染を広げる点が問題となりました。

（三）感染拡大を防止する方法 そのものは、これまでの感染症との闘いで、ある程度まで明らかになっています。混雑した場所を避けて人との距離をできるだけとること、それに加えて石鹸での手洗い、帰宅後のうがい、外出時のマスク着用などはいずれも有効な手段です。人との接触を減らすため、「ステイホーム（うちにいましょう）」というフレーズが世界で使われています。国によっては感染症の拡大をほぼ完全に封じ込めることに成功したところもあります。しかし、二〇二一年一月六日現在、世界の感染者数は八千六百万人、死者は百八十六万人と報道されています（注2）。「ステイホーム」などの手を打たず、感染者の自然治癒による集団免疫の獲得によって解決を図ったスウェーデンの死者は二〇二一年一月十四日現在で一万人を超えました。同国の人口はおよそ一千万人ですから、同じ比率を当てはめると、日本の場合は十二万人以上の死者が出る計算となります。（お）対策を全くとらない場合には、人命を失うリスクが高まると考えざるを得ません。しかしながら、（A）どこの国の政府も対策に苦慮しており、封じ込めは容易なことではありません。なぜでしょうか。

現代社会は、多くの人々とかかわらなくては生活そのものが成立しなくなっています。「ステイホーム」を続け、最低限の外出にとどめれば感染拡大は抑えられますが、必要最小限の買い物しかないのでは資金が市場に回らず、企業は労働者に賃金が払えなくなり、人々が買えるものがさらに少なくなるという悪循環に陥ります。自給自足経済で回っていた農村であればロックダウンも簡単でしょう。例えば、日本近世の江戸の町には夜間外出禁止令もありましたし、日本国内の長距離移動も関所でチェックできる体制でした。しかし今日の私たちは、仕事であれ勉強であれ子育てであれ、自宅周辺にとどまっていたは難しいことばかりです。自宅からオンラインでつながったパソコンなどを通して仕事を行うことが（オ）すいしようされていますが、医療、福祉、教育、運輸などオンラインではまわらない業種があります。また、家にこもって「不要不急」の外出を減らすと、今度は産業に資金が回らず、企業や店などの経営が立ち行かなくなります。企業の経営が苦しくなればそこで働く人は十分な収入を得られず生活できなくなってしまうだけでなく、国家の税収も減ってしまいます。現代社会は大量消費社会であり、「不要不

急」の外出によって支えられている社会でもあるのです。しかし、従来通りの生活では感染拡大を防げないのも事実なので、どのような対策をとればよいのかを決めるのはとても難しいのです。

今後いつまで感染拡大が続くのか、まったく見通すことができない状況ですが、これまでのところ新型コロナウイルスは感染による被害以外にも、(B)二つの問題を社会にもたらしました。

第一の問題として、新型コロナウイルスに関する誤った情報に振り回されてしまう人々の存在が挙げられます。科学的な根拠を疑い、「コロナは風邪だ」として感染対策をあえて無視しようという動きや、逆に感染をおそれるあまり対応にあたっている医療や介護のスタッフとその家族を忌避したり、感染者を排除しようとする動きがみられます。医師、看護師、保健師や介護の現場のスタッフは十四世紀の教会の司祭と同じく、感染のリスクをおかして対応にあたっているのに、その人々や家族に対する心ない対応から、(4)疲弊しきって現場を離れるスタッフも出ています。昨年の春には消毒薬やマスクだけでなくトイレトペーパーなどもデマのため品薄となり、商店やドラッグストアは商品を求める顧客への対応に追われました。昨年四月二十三日には、当時のアメリカ大統領トランプ氏が、「紫外線が非常に強い光を体内にあててみてはどうか。また、消毒液はあつという間にウイルスに効くようだ。注射したりできないものだろうか。興味深いと思う」と記者会見で発言して、医療関係者から強く批判されています(注3)。医療関係者には常識ですが、殺菌できるほどの強い紫外線は人体に有害です。人体に害のない波長の紫外線を用いて身体の表面についたコロナウイルスを不活性化する機器は開発されていますし、アルコールなどの消毒液は物や皮膚などの表面についたウイルスの無毒化に効果はあるので、すべて間違っているというわけではありません。しかし、紫外線や消毒薬は感染して体内に入ったウイルスを除去できるものではありませんし、強すぎる紫外線を無防備に浴びたり、消毒液を注射したり飲んだりしたら人体の機能を損ない大変なことになります。この発言は一部に正しい点を含むがゆえにかえって危険であるという例であり、発言者の社会的地位が高くても間違っているという例でもあります。新型コロナウイルスをめぐる(5)膨大な報道やインターネット上の情報の真偽を見分けることは困

難であるため、人は信じたいと思う情報に吸い寄せられてしまいます。そのため何が正しいかをめぐる対立も起きています。情報をどう判断するかという情報リテラシーが求められているのです。

第二の問題はより深刻です。感染防止のために世界の経済状況は悪化しています。そのため、これまでもあった人種や階層間での経済格差などがあらためて問題となり、社会が分断される危険にさらされています。全米疾病予防管理センター（CDC）のデータでは、人種別の感染者や死者の比率は、アフリカ系やヒスパニック系などの非白人が白人よりも高いことを示しています。ある研究所はこのデータから、所得格差は住宅環境、教育、受けられる医療サービスなどの差につながり、結果的に健康状態にも影響を及ぼしていると指摘しています（注4）。人種差別については、二〇二〇年五月二十五日にミネソタ州でおきた警察官によるアフリカ系男性の暴行死事件をきっかけに全米で抗議デモが行われ、一部では暴動にまで発展しました。新型コロナウイルス感染の危機感と失業問題は社会における人種間の不平等をさらに浮き彫りにしたのです。日本でも雇用が保証されておらず不況になると人件費削減の対象となりやすかった非正規雇用の人が仕事を失うことが多く、生活に困る人が増えました。同じくパートなど非正規雇用の割合の多い女性の貧困問題も拡大しています。社会で弱い立場にある人々がさらに大変な状況においやられています。自己責任論などを振りかざす論調があると、こうした人々は助けを求めることもできず見捨てられたと感じ、その怒りや悲しみが暴動や自殺など他者や自分を傷つける行動に結びついてしまうケースも出てきています。

こうした問題への対処は簡単ではありません。しかし、学び、考え、国内や海外の人々とインターネットなどを通して交流し、意見交換をすることは現在も可能です。こうした問題に地球市民としてどう取り組むかが、私たち一人ひとりの課題となっているのです。

（注1） Office for National Statistics, UK, How has life expectancy changed over time? (9 September 2015), <https://www.ons.gov.uk/Peoplepopulationand-community/birthsdeathsandmarriages/lifeexpectancies/articles/howhaslifeexpectancychangedvertime/2015-09-09> 二〇二一年一月七日閲覧

（注2）NHKの報道「新型コロナ 世界の感染者八六〇〇万人 死者一八六万人」(二〇二一年一月七日)。アメリカのジョンズ・ホプキンス大学のまとめから。

(<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210106/k10012798871000.html> 二〇二一年一月七日閲覧)

(注3) BBC, Coronavirus: Trump's disinfectant and sunlight claims fact - checked (24 April 2020), (<https://www.bbc.com/news/world-us-canada-52399464> 二〇二一年一月七日閲覧)

二〇二一年一月七日閲覧)

(注4) Brookings Institution, Race gaps in COVID - 19 deaths are even bigger than they appear (June 16, 2020), (<https://www.brookings.edu/blog/up-front/2020/06/16/race-gaps-in-covid-19-deaths-are-even-bigger-than-they-appear/> 二〇二一年一月七日閲覧)

問一 傍線部(1)から(5)の読みをひらがなで書きなさい。(配点各一点)

問二 傍線部(ア)から(オ)を漢字に直しなさい。(配点各一点)

問三 本文中の(あ)から(お)に入る語として適切なものを次の中から選び、その記号を書きなさい。なお、同じ語が二度用いられることはありません。(配点各一点)

- A やがて
- B いわゆる
- C 従って
- D 依然として
- E 前述の

問四

傍線部(一)「黒死病」に関する例について、以下の文のうち、本文中の記述に当てはまらないものを一つ選び、その記号を書きなさい。(配点五点)

- A 黒死病流行の結果、領主により移動の自由を奪われた農民たちは反乱を起こした。
- B 黒死病により多くの司祭が亡くなると、聖職者でなくても信徒の男性や女性が告白を聞くことで終油の秘跡と同じ効果が得られるとする文書を大司教が残している。

- C 黒死病のため人手が足りなくなり、亡くなった家族の遺体は、残りの家族が自ら埋葬せざるをえなかった。
- D 黒死病のせいで多くの労働者は仕事を失うことになり、貧困問題に直面せざるをえなくなった。
- E 黒死病は地中海交易ルートを通じてイタリアに上陸した後で、ヨーロッパ全土に広がっていった。

問五

傍線部(二) 当時は何がこうした病気をもたらすのか、よくわかっていませんでしたとあるが、その後明らかになったことは何か、以下の文のうち、本文中の記述に当てはまるものを一つ選び、その記号を書きなさい。(配点五点)

- A 病気は悪い空気をもたらすため、香をたくことで防げることがわかった。
- B コッホは特定の細菌があらゆる病気を引き起こすことを証明した。
- C 天然痘ウイルスの発見よりも先に、天然痘の予防法が開発されていた。
- D 黄熱病の病原体は、ウイルスではなく、細菌である。

E ジェンナーは、牛痘患者からとった液を注射することで天然痘を予防できるとし、それをワクチンと命名した。

問六 傍線部(三) 感染拡大を防止する方法について、以下の文のうち、筆者の意見として最も適切なものを一つ選び、その記号を書きなさい。(配点五点)

A 新型コロナウイルスの感染は、接触感染だと考えられるため、人との距離をとって家にこもっていることが重要である。

B 新型コロナウイルスの感染は、接触による感染だと思われていたが、飛沫でも感染することが分かったため、人混みを避けて、石鹸での手洗い、うがい、マスクの着用などが重要である。

C 新型コロナウイルスの感染には、飛沫感染だけでなく、空気感染も認められるため、紫外線による殺菌が必要である。

D 新型コロナウイルスの感染予防としては、多くの人が免疫を獲得することが重要であるため、集団免疫の獲得を目的とした政策を講じることが求められる。

E 新型コロナウイルスの感染予防としては、多くの人が免疫を獲得することが求められるため、ワクチン接種の早期実現が何よりも重要である。

問七 傍線部(A) どの国の政府も対策に苦慮しており、封じ込めは容易なことではありません。について、その理由を筆者はどのように考えているのか、六〇字〜七〇字でまとめなさい。(配点五点)

問八 傍線部(B)二つの問題を社会にもたらしましたについて、次の三点に答えなさい。(配点十五点)

- (1) 第一の問題とは何か、六〇字〜七〇字で述べなさい。
- (2) 第二の問題とは何か、六〇字〜七〇字で述べなさい。
- (3) 筆者の意見に対するあなたの考えを、理由をあげて六〇字〜七〇字で述べなさい。

以上